

グローバル COE の役割 —— 2009 年度を振り返って ——

拠点リーダー 落合恵美子

2009 年度は、私たちの進めるグローバル COE にとって文字通り「激動」の 1 年でした。まずは私たち自身の想定を超えて成長しつつある成果についてお話ししましょう。私たちの GCOE の柱は、教育部門における「アジア版エラスムス・パイロット計画」と研究部門における「親密圏と公共圏の再編成過程の解明」です。そのなかの「アジア版エラスムス・パイロット計画」は、計画 2 年目で大きく進展し、目標達成に向けた手応えを感じています。この計画は、拠点（京都大学の 6 研究科 2 研究所）と海外のパートナー拠点（13 地域 15 研究機関）とのあいだで、大学院生を相互に交流させ、共同で単位を出すだけでなく研究指導にあたるというものです。また同時に、拠点間で教員も交換して相互に「親密圏と公共圏の再編成」に関する講義を行うということも目的にしています。2 年目にはいって、京大からの派遣、京大への受入ともに軌道にのりはじめ、海外パートナー拠点の教員の行う英語講義も、すっかり京大のカリキュラムに定着し、学生の評価も高いものになっています。学生と研究者の相互交換は、単位互換に発展させ、将来的にはヨーロッパ共同体の学生・研究者交換プログラム「エラスムス」のアジア版の実現につなげたいという意味で、「アジア版エラスムス・パイロット計画」という名称を付けましたが、その実現もまったくの夢物語ではなくなったように思います。

「アジア版エラスムス・パイロット計画」の順調な進展にともない、計画 2 年目には、国際学会で報告する拠点内の大学院生の数が激増しました。また英語だけでなく、中国語、韓国語も含む授業カリキュラムを整備したことで、中国、韓国に留学、調査にでかける院生も急増しています。次世代研究者のイニシアティブを重点的に推進した成果としては、たとえば韓国ソウル大学の大学院生と京大拠点の大学院生が、「アジア版エラスムス・パイロット計画」を利用して相互に留学しながら、共同研究ネットワークを構築し、GCOE の企画としてソウルと京都でワークショップを開催し、共同研究を深化させているという例もあげられるでしょう。

私たち GCOE のもう 1 つの柱である研究部門も、厳しい予算制約のもとで大きな成果をあげつつあります。国際共同研究の成果を共有するためのシンポジウムを年数回、次世代研究者のためのワークショップを年一回開催し、海外パートナー拠点から 40 名近い研究者を招いて、理論的実証的な研究の進展の確認と今後の方向性について問題意識を共有しました。

しかし調査研究（とりわけ海外調査）に関しては、2009 年は、大きな困難に直面しました。これから「報告書」の序文としては少々異例ですが、予算カットと（とりわけ GCOE 型の）学術振興について一言私見を述べさせていただきます。その意図は、たんに不平不満を伝えたいということではなく、こうした出来事（アクシデント）が日本の学術の発展

を妨げてきた構造的問題とも関係しているように思われるので、今後につづく次世代の研究者のために必要と考えるからです。私たちの GCOE が 2009 年度に経験した研究上の困難は、グローバル COE という事業そのものが、予算問題で大きく揺さぶられたことと関連しています。継続中であったグローバル COE の 2009 年度予算は、2008 年度予算より一律 7% の削減となりました。同じ 7% と言っても、事業開始から 2 年目の拠点と 3 年目の拠点ではその意味するところは全く異なります。事業開始年は年度途中での採択となりますので、およそ 9 カ月分の予算しか申請しないのが普通です。通常年の 12 カ月分の予算を申請するのは 2 年目からです。ですから、3 年目の拠点は通常年の予算の 7% が削減されただけですが（それでも大きな打撃であったとは思いますが）、2 年目の拠点にとっては、9 カ月分の予算からさらに 7% を減額した予算で 12 カ月を乗り切らねばならないということであり、予算額を知らされた時の衝撃は、ほとんど絶望感と言ってもよいほどのものでありました。

この衝撃でもっとも深刻な影響を被ったのは調査研究に関わる活動でした。予算が削減されても人件費や国際会議の費用はほとんど動かさせません。そのため 2009 年度の当初予算では研究費と成果公開費はほとんどゼロという、とんでもない予算になってしまいました。若手プロジェクトも超緊縮財政で進めてもらうしかないことを告げた時、若手研究者から殊勝な返事が返ってきました。「少ない予算でも頑張ります。1 年目に海外調査をさせていただいたので、2 年目はその分析をしながら、読書会をして理論化をはかります。」というのです。なるほど、資金のあるときはフィールドワーク、無いときは読書と理論化。これが現代版の「晴耕雨読」だろうか、と感心しましたが、予定通りの調査研究を進められないことを申し訳なく思いました。その後、大学からも総長裁量経費などのかたちでご支援をいただくことができました。おかげさまで無事、研究も成果公開も予定通り、いや予定以上の成果を挙げることができました。各方面の皆さまのご支援にこの場を借りて感謝申し上げます。

しかし年度の後半には、もうひとつの「大地震」がありました。国民的注目を集めた事業仕分けです。COE のような大型の研究費の必要性について疑問が出され、大学の日常業務を支える運営費交付金と通常の科学研究費によって研究もすべて賄えばよいではないか、といった意見が出されました。しかし当然のことながら、グローバル COE は、通常の研究費とは違います。新たな時代の学術はいかにあるべきかというビジョンを描き、学術の大きな方向付けを行って、それを実践するための研究・教育体制のモデル形成をするのが、グローバル COE の役割ではないでしょうか。通常の研究費では研究や教育それ自体を進めることはできますが、それを支える仕組みの変更や新たな構築はなかなかできません。COE (Center of Excellence) やそれに類する大規模学術拠点形成プログラムをもつ国は多いですが、それはイノベーティブな学術研究の発展のためには、制度づくりも同時に行うプログラムが必要であることが広く認識されているからでしょう。

例えば私たちの COE では、学術面におけるアジア共同体の形成につながるような、アジアを中心としたグローバルネットワークの構築を実践してきました。先述したように現在

までに、アジア、ヨーロッパ、北米の 15 の大学・研究機関を「海外パートナー拠点」とする連携関係を築き、学生と研究者の頻繁な相互交換を行いながら、国際共同研究プロジェクトを実施しています。また「海外パートナー拠点」の研究者と共に、アジア諸国の地域言語で書かれた重要業績を収集・翻訳・出版して、アジアの知的共通基盤を形成するというプロジェクトも進めています。このような体制づくりを行って初めて、急激な少子高齢化や環境問題などのアジア共通の課題に関する国際共同研究も可能になるからです。

私たちはこうしたビジョンをもって、1年9カ月をかけて、ここまでプログラムを推進してきました。若手研究者たちに実力を発揮できる場所を与え、「海外パートナー拠点」の研究者たちとの信頼関係を築いてきました。これからの3年間で、こうして整えた体制をより堅固なものにして、研究面でも教育面でも国際連携でも、ますます豊かな成果を上げていくことを強く願っており、その自信も、芽生え始めているのです。